

18世紀フランス宮廷女性の美意識の変遷 —美しい体型と姿勢の関係—

学芸学部 被服学科 伊豆原 月絵

要旨：本研究は、1700年代を中心に、1600年代中葉以降のフランス宮廷を中心とした欧州貴族の女性にみられる美意識を明らかにすることを目的とする。往時の女性に対する観察者の「美意識」については、図像資料や文献資料を基に論じた。文献資料からは、1600年代から1700年代初期までは、情感を表現する眼差しや表情を「美しい」としていたが、1700年代の中葉にかけて、次第に女性の外見に重きをおいた記述が増え、「豊かな胸」「見事な肩」「背が高い」などの外見的特徴が主な美の構成要素になっていく。

また、美しさを構成する要素は、「真直ぐ伸びた背中」、「高い胸」のデコルテと「なで肩」であり、それは、姿勢と体型に関係がみられることを、人体解剖学的見地より考察し、新しい視点を示唆した。

キーワード：ロココ、美意識、姿勢、体型、美しさ、人体解剖学、見られる、見せる

1. はじめに

本論文では、1700年代のフランス、ロココ時代を中心に宮廷で求められた「美しい女性」の条件と美意識について、フランス、オーストリア、デンマークなどの図像資料および文献調査や文学にみられる文学表現から、往時に求められていた女性の体型および姿勢について考察したい。

また、欧州の博物館や神戸ファッション美術館の収蔵品の調査から得られた、形体やサイズなどの知見も併せて考慮し、往時に「美しい」とされた人体の特徴について、人体解剖学的見地からも考察する。

2. 方法

本論文では、1) 1700年代の図像資料を調査する。2) 文献および文学表現にみられる「美しい女性」について図像資料と併せて、体型と姿勢について比較検討する。3) 1700年代の女性の体型や姿勢について人体解剖学を基に考察する。

3. 1700年代の欧州の時代背景

3-1 女性の美しさ -立場と役割-

18世紀のフランス・ブルボン家は、ハプスブルグ家と欧州の覇権をめぐって対立していたが、ルイ15世の時代に、優れた芸術家や職人がパリに集まり、建築、家具、衣裳などのフランス様式が発展し、欧州各国は競ってその芸術様式を模倣した。

フランスでは、ルイ15世の治世が60年あまり続き、身分や地位を誇示するために、さまざまな儀式やそれに付随する宮廷の礼儀作法が生み出され、女性の立場や役割に変化がみられる。

女性の姿を目にするのは、公の舞踏会などの公的な儀式のときであり、ルイ14世の王妃、ルイ15世の王妃も、従順で、容姿も目立って美しいということもなく、ほとんどは、私的な居室でボビンレースや刺繍などの手仕事をし、子を生子教育することが女性、妻の役割であった。このころには、儀式の際には、公妾（公認の愛妾）が王妃と列席していたし、王妃に代わって公妾が、各国の大使などを接待した。公妾はサロンを開き、詩歌、文学、音楽、演劇に始まり、バレエ、オペラや戯曲などの舞台芸術へのよき庇護者となっていった。

3-2 女性の美しさ -なだらかな肩-

サロンを開いた女性は、どのような人であったのだろうか。サロンは、16世紀アンリ4世の治政の時に始まり、17世紀に広く流布したが、カトリーヌ・ヴィヴィエオンヌこと、ランブイエ侯爵夫人が最初にサロンを開いたといわれ、そこは、それ以後約50年あまり、社交場となっていた。このランブイエ夫人についてエミール・マーニュが、次のように述べている。

夫人は、花模様の服か金の縫いとりのあるレースの

服に身を包んでいた。髪は、世にも美しい肩の上に垂れ、首には、真珠の首飾りを何重にも巻きつけていた。^①

「髪は、世にも美しい肩の上に垂れ」とあるように、このころの女性の「美しい」とされる身体的特徴の一つに、なだらかな肩があげられよう。

1637年頃に、アンソニー・ヴァン・ダイクが描いた図2のチャールズI世の娘、メアリー女王の肖像画をみると、この王女は、まだ少女ではあるが、首から肩にかけて、なだらかな山のような「なで肩」で描かれている。

1600年代の初頭の衣装は、胸の上部の首から下の部分の「デコルテ」に薄絹の紗をかけて、このデコルテ部分は絹を通して肌が見えるものの、公には、隠すようにしていた。しかし、この肖像画では、デコルテを隠していたレースが、その役割を果たさず、ドレスの襟開き部分からドレスの胸や肩に沿われて開き、肩ラインがはっきり表れている。これ以降、女性の衣装は、首から下の胸の部分「デコルテ」を強調した衣装デザインに変化していく。

3-3 美しさの条件 -肌・体型-

1600年代中葉になると、顔の表情や目の特徴、例えば、「精彩な」「穏やかな」「物憂げな」「憂いを帯びた」という内面的な表現を含有する表現で賛美していたものが、1600年代後半になると、見たままの、外面的な身体的特徴を重要視し、目、髪、眉毛、肌の色、肌の感触（艶のよい、きめのこまかい）など、具体的になってくる。また、胸の大きさや形、腰の細さなど、体型の各部分にまで言及している。

1620年生れのニノン・ド・ランクロについては、



図1 17世紀の貴族

顔つきは、整った卵型、色白できめ細かな肌、世にもすんなりした脚、体つきはつり合い良く、胸も細腰も形よく、まなごしは優しげだが、機敏さをもっていた。^②

1619年生れの、ロングウイル侯爵夫人・アンヌについては、1646年の頃の記述では、

アンヌは、27歳になったばかりであった。多くの人をとろかす投げやりな風情に加えて、精神の憂悶が、ほの見えて、これがまたえも言われぬ魅力となった。姿かたちも美しく目も髪も黒々としていた。^③

1665年ごろの15歳の女優、ネル・ゲインは、

小柄でほっそりしたきれいな脚と小さな足をしたネルは、……。赤褐色にところどころ金髪の混じる豊かな髪を自慢していた。目は淡いブルーで形のいい眉と長く濃い睫毛に囲まれ、髪と際立った対照をみせていた。^④

とあるように、豊かな髪や目の他に「脚」のきれいなことも魅力的であったのであろう。舞台上で踊り、その際に、ちらりと脚をみせたという。

また、イギリスのチャールズ2世の妃、カトリーヌ王妃は、美しい脚をみせるような男性の服装を取り入れ、宮廷の婦人の間に、トラウザーズを流行させたといわれる。^⑤

1600年代も後半になると「肉感的な」「肉付きの良い」などの表現がみられ、1640年生れ、アテナウス・ド・モンテスパン夫人については、



図2 チャールズI世の娘、メアリー女王、1637年

燃え立つような赤みのある金髪、堂々として肉感的な体つき、大ぶりの口に並びの良い歯、すんなりと形の良い手指^⑥

ルイ13世のアンヌ王妃について、アンヌ・ドートリッシュの回想記では、

王妃の亜麻色の金髪は・・・、そのころ美人は金髪が望ましいとされていたので、女たちは、髪染めをほどこしていたが・・・王妃はその必要がなかった。胸はふくよかで豊かで、幾分下がり気味であった・・・。目は緑を帯び、精彩をはなっていた・・・^⑦

モンバゾン夫人については、

背丈は高く、少し立派すぎる胸は、ふつうの乳房の1倍半ほど張りだして、雪のように白くしかも良く緊っていた^⑧

「肉づきの良い」それでいて、「柳腰」、「細腰」という表現がみられ、デコルテは、肌艶よく白く、「胸はふくよかで高く」、ウエストは細い女性を「美しい」とされていたことがわかる。美しい髪の色も、黒髪から、金髪へと変わっていく。

3-4 美しさの補助 - コルセット -

前述したように、女性の胸は強調され、胸は、幅広く、厚さがあり、胸の下からウエストにかけては、細いことが望まれた。この形状を自然に作ることは、大変難しい。そこで、補正下着であるコルセットが着用され、背中へ、真直ぐに伸ばされ、胸は前に突き出て、鎖骨から下の胸の上部のデコルテは、胸板に柔らかな乳房がのり、なめらかで、なだらかな曲線を描いていることが美しいとされていた。

3-4-1 コルセットがつくる - 背中の美 -

フランスの宮廷画家ヴァトーが描いた作品では、1714年から20年くらいまでに描かれた女性の衣装のほとんどは、このヴァトーブリーツをたたんだローブ・ヴァラント⁽¹⁾を着装している。

このヴァトーブリーツは、後ろ見頃の、肩のラインから縦に襷をたたみ、床面に向かって、襷が垂直におりるように作られている。

図3の左端に立っている女性は、この後ろに裾を引

くローブ・ア・ラ・フランセーズ⁽²⁾を着装しているが、野外のために、ドレスの上衣のローブ(マント)を後ろで、くくっている。

筆者が行った神戸ファッション美術館やイギリスのバースにある衣装博物館の収蔵品などの実測調査によると、この当時は、ドレスの布の表からリボンで結んだり、ドレスの内側に止めた紐を用いて、からげていたことがわかっている。

また、この時期の作品に描かれたローブの素材は、ほとんどが、張りがあるサテン、もしくはタフタやダマスク、プロケードのドレスであったため、立った時の後ろ姿は、プリーツが背中までたたまれているものの、ウエストから下は、裾に向かって緩やかに広がるフォルムになっている。

次に、図3の画面の右側の地面に座っている女性の後ろ姿は、肩のラインからまっすぐヴァトーブリーツが地面へ向かって下りていることがわかる。

また、この女性は、左側の男性を見上げて話しているため、右肩が少し傾斜しているのが見て取れるが、このような姿勢を取った場合、右のウエスト周りに襷が膨らんでたるむことが予想されるにも関わらず、この右脇からウエストの部分は、まっすぐに、襷が下に向かっておりている。

ここで注目したいのは、本来、人体の動作において、左上を向いた場合、右脇の筋肉は縮むのにも関わらず、伸びているということは、この女性は、上半身が曲がらないくらい、堅い芯の入ったコルセットを身につけていたであろうことが、考えられる。つまり、女性は、動作を妨げるほどの堅いコルセットを身につけていたのであろう。

また、中央の女性については、左側のくだけた姿勢の男性と並んで座っているのにもかかわらず、女性の



図3 ローブ・ヴァラント着装、1717年

上半身は、背筋が伸ばされ、上半身が緩んでいないことがわかる。

女性は、このような、ゆったりとしたローブを身につけているため、コルセットで身体を締め付けることがなくなったように思われるが、実際には、上半身は、かなりきつく締めつけたコルセットを着装していたであろうと考えられる。

1739年、フランソワ・ブーシェが描いた、図4のフランスの貴族社会の朝食（または、午後のお茶の風景を描いたもの）であるが、左の女性は、ヴァトープリーツを後ろ見頃にたたんだ、ローブ・アラ・フランセーズを着装している。



図4 朝食（昼食）、1739年

図5を注意してみると、女性の背中の肩甲骨の上の部分は、少しふくらみ、肩甲骨から下は、まっすぐに襷が下りていることが見てとれる。この後ろにたたんだヴァトープリーツは、実測調査の見解から、肩の上



図5 部分 ヴァトープリーツ着装の女性 1739

部で、縫い止め、背中部分には、数か所縫い止めているだけのドレスが多くみられることから、このドレスも同様であろう。肩甲骨の下あたりから、折りたたんだ襷は、膨らみながら裾に向かって広がっていく。しかし、この女性の後ろ姿は、座って前かがみの姿勢であるにも関わらず、背中が、真直ぐになっている。もちろん、後ろがしわにならないように、座る時に、後ろを引っ張って座ったであろうことは予想されるが、このように真直ぐなラインを示すということは、比較的堅い作りのしっかりとした芯の入ったコルセットを身につけていたと考えられる。



図6 右・ヴァトープリーツ着装の小間使い

図6は、朝の身支度の場面を描いたとされる、ブーシェの作品であるが、右端の小間使いとされている女性は、ヴァトープリーツのローブ・アラ・フランセーズを着装している。ここでは、後ろ見頃にたたまれたヴァトープリーツが床面に対して、垂直に下りて描かれていることから、女性の背筋は、真直ぐであることが分かる。「背筋がまっすぐである」その理由は、このドレスの特徴として、前述したように、後ろ見頃の襷は、折りたたまれた襷を数か所縫い止めているにすぎない。着用者が猫背であった場合、襷は横に引っ張られ、このようなプリーツをたたんだ様相にはならない。

また、小間使いとして、女主人の身の回りの世話をする若き女性は、立ち居振る舞いからマナーまで、この女主人により、教育されている。この部屋の様子から、往時流行した、シノワズリー風の調度品が描かれていることから、裕福で教養のある家であろう。そうであれば、なおのこと、この背筋が伸びた姿勢は、女性の立ち居振る舞いの、エチケットであったであろうことが考えられる。

このような理由から考えると、この時代の「美し

さ」の条件の一つには、「真直ぐに伸びた背中」という概念があったであろうと考えられる。

3-4-2 「美しさ」 - なで肩 -

再び、図6の小間使いに注目したい。全体的に華奢な体型ではあるが、首から肩先までが、なだらかな山のような「なで肩」になっていることが見てとれる。また、図7、8でも「なで肩」と「デコルテ」が強調されている。



図7 ディアナに扮したポンパドール夫人、1748年

ルイ14世が崩御し、ルイ15世の治世になると、その公妾ポンパドール侯爵夫人が、この時代の「美」のモデルの一つであろう。図7の肖像画をみると、柔らかで、肉付きの良い肩と白くきめ細かな肌のデコルテを丹念に描いていることがみてとれる。



図8 ポンパドール侯爵夫人

3-4-3 「美しさ」 - 真直ぐな首 -

肖像画をみると、どの女性も背筋を伸ばし、胸を張り、首を後ろに引きのばしている。この姿勢は、何を意味するのであろうか。

デコルテを美しく見せるには、どのような姿勢を保てばよいかを考えてみると、大胸筋を引き上げるために、肩を後ろに引き、首を後ろに引き上げることで、デコルテの胸の筋肉、大胸筋が緊張し、バストを上へ上げることができる。

しかし、この姿勢から首の緊張を緩め、首を前にすると、とたんに大胸筋が緩み、バストの張りはなくなるのである。つまり、首を後ろに引き、まっすぐにする姿勢は、バストを上げ、豊かなデコルテをつくるのに、必要な姿勢であった。

4 人体解剖学からみた - 大胸筋・胸線の発達 -

往時は、「顎の下まで膨らんだ乳房が美しい」という表現があり、乳房が上に上がり、デコルテ部分に膨らみがあるのを美しいとされていた。人体の胸部には、鎖骨の下に大胸筋があるが、これを鍛えることにより、胸部の筋肉が発達し、乳房を支える筋肉は、胸を上へ引き上げることができる。また大胸筋の発達は、胸線に刺激を与え、乳房の発達も促す。このように、大胸筋を鍛えることは、この胸部のデコルテ部分の脂肪の下に筋肉を発達させ、美しい胸のラインを作ることができたと考えられる。



図9 エドモンド・モートン・プレイデル夫人、1765年

4-1 大胸筋の筋力アップの方法

では、どうやって筋肉を鍛えていたかということ、日常の動作、姿勢が、乳房を上げる筋肉を鍛えることができたと考える。

例えば、背中の肩甲骨を締めることにより、大胸筋を鍛えることができるが、往時の女性は、コルセットで肋骨を強く締めていたため、肺が縦に長くなり、浅い息しかできずに辛いので、肩甲骨を寄せて横隔膜を広げて、息をしようとしたと考えられる。この横隔膜を広げる動作が、日常的に行われ、結果的には、肩甲骨を寄せることになり、大胸筋を鍛えることになった。もちろん、コルセットは、女性の乳房を下から、腋下より上部まで上げていたので、全てが筋肉で、保たれていたわけではない。しかし、往時のコルセット

と女性の姿勢は、肩を後ろに引く所作を導き出し、大胸筋を鍛えることになったと考えられる。

4-2 僧帽筋の筋力アップの方法

また、肩がなだらかな「なで肩」を美しいとされていたが、肩が、山のようにふっくらして肩先に向かって、なだらかな曲線を描いている。この部分の僧帽筋が発達していることがわかる。

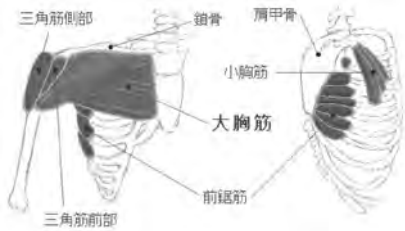


図10 胸部の筋肉組織図

では、どうしてこのように、僧帽筋が発達したのであろうか。それは、常にコルセットで締め付けられているために、呼吸がし難い。肺に空気を送り込むためには、肩を後ろに引き、深呼吸を行う際に、肩を下げ、肩甲骨を締めて、肋骨も広げる動作を行うことで、呼吸がし易くなる。また、この動作は、大胸筋に負荷が加わり、僧帽筋と三角筋に併せて刺激を与えることで、これらの筋肉の発達を促し、僧帽筋と三角筋の発達した「なで肩」になったと考えられる。

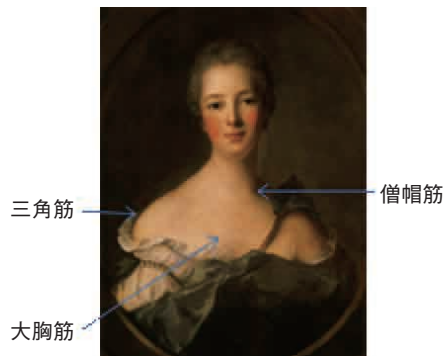


図11 上半身の筋肉図



図12 マリー・アントワネット1775年と胸像1782年

5 美しさの構成要素 -見られる女性-

5-1 隠していた部分を見せる

1600年代の図14の資料では、女性のなだらかな「なで肩」とともに「腿脚」などが丁寧に描いているが、これは、スカートの下にペチコートを着ることを許されていなかったため、太腿や脚の形体が衣服の上から露わになっていたと考えられる。女性の「美しさ」の一つに、「見事な脚」「きれいな脚」という表現がみられるが、現代のように、脚を見せることはありえず、この表現は、前述の舞台女優の特別な他は、図14に見られるように、衣服の上から表れる脚の形体について述べたものであろう。



図13 フランス王女アデライド、1749年

ところが、1700年代の婦人たちは、スカートを膨らませる下着のパニエを付け、スカートの下には、最低でも3枚のペチコートを着ていたため女性の脚の形状が露わになることは少ない。



図14 1600年代フランスの貴族

1700年代の中葉になると、デコルテ部分の開きは、広くなり、女性より背の高い男性は、女性の傍によれば乳房まで見ることができた。かつて女性の胸どころか、首や手指などの素肌を一切見せることがなかった時代から、1700年代には、性差を強調し、肌を露わにして、自分の魅力を誇張し、それにより男性からの寵愛を受け、社会的に力を発揮する機会を得たのであろう。

5-2 見られる姿

容姿について、1700年代になると女性は、居室において観察者（他人）の「近い距離から見られる姿の評価」から、舞踏会や儀式などホールでの、「遠い距離から見られる姿の評価」に変わる。至近距離での容姿の評価では、前述したように、顔や目の細かい表情が、観察者に魅力を感じさせることができたが、ホールなどの広い空間では、遠くからでも存在が際立たなければならぬ。

往時の人々は、女性のどこに「美しさ」を求めていたか、美の構成要素について、ルイ15世の公妾ボンパドゥール侯爵夫人の評価から考察したい。

普通の人よりもやや大柄で、すらりとし、物腰は自然で、しなやかで、優雅であった。その顔は、身体とよく調和した申し分のない瓜実顔で、美しい髪は、ブロンドというより、淡褐色で、同色の眉毛が映える大きな目をしていて、申し分なく整った鼻、魅力にあふれる口元、大変美しい歯と、かぎりなく優しい微笑みを備えていた……。それに世界で一番美しい肌の持ち主であった。^⑦

「普通の人より大柄」「すらりとしている」とあるように、背も高く、人目を引く存在であったことがうかがえる。また、「世界で一番美しい肌」とあるように、顔、デコルテ、腕などの身体部分が、美しかったであろうことがわかる。

際立つ存在になるには、同じく観察される対象である他者の女性よりも「背が高く、背筋が伸び、すらりとした」姿であることが条件の一つになる。女性たちは、舞踏会などでは、同性と並んで立っているため、その中で、ひと際目につく、目立つことが、結果的に「美しい人」の評価につながる。

また、前記したように、「肌艶のよい、色白の女性」が美の条件の一つであったが、きめの細かい肌は、わずかな蠟燭の光をも顔に受け反射し、顔は、明るく白く輝いて見えたことであろう。

女性が、「遠くから見られる存在」になったことで、遠くからでも存在感を放つこれらの身体的特徴が重要視されたと考えられる。



図15 ボンパドゥール夫人の肖像画、1756年

5-3 批評される女性

女性は、従順で夫や父に付随する存在から、主役となり、「見られる」存在となっていたことは、前述した。公爵や侯爵夫人や貴族の愛人が、浮名を流すと現代のメディアと同じように、事細かく恋愛や痴話喧嘩などのゴシップが、小唄や演劇の題材になり、巷間に広がる。それも故意に、悪意に満ちた、根拠もないうわさなども流布された。一般民衆も貴族も、版画や風刺画、小唄などから、国王の王妃や寵妃、貴族の婦人、女優などの容姿や性格、暮らしぶりなどを知りようになり、批評するようになる。女性は、人々から「見られ」、「評価される」存在になっていった。

6 結論

女性は、1700年代の初期の「近距離から見られる存在」から「遠い距離から見られる」存在になり、「美しくさ」の基準が、内面の情感を包含する「眼差しや表情」から、遠くからでも目立つことを重視した大振りな「体型」へ、外見の重視へと変化していった。

1700年代中葉になると、金髪、卵型の顔、碧い瞳、色白で、きめ細かな艶やかな肌をもち、背が高く、首は真直ぐに背筋が伸び、豊かなデコルテをもつ、肉づきの良い豊満な女性が「美しい」とされた。また、外見の「美しさ」が、脚について述べている記述が見られなくなり、デコルテや細腰にとって代わる。胸を高くし、ウエストを細くするために常に締め付けるようなコルセットを着装し、乳房の位置を下から上へと持ち上げる。

コルセット着装の結果、呼吸が苦しくなり、それを回避するために、肩甲骨を寄せて横隔膜を広くして胸で呼吸する動作をする。この動作は、肩にある僧帽筋の発達を促し、なだらかな山を描く「なで肩」の体型

をつくる。

また、肩を下げて後ろに引き肩甲骨を寄せることで三角筋が発達し、乳房の土台となる胸の上部の大胸筋を引き上げ、バストアップになり、ふくよかなデコルテとなる。この引き上げた乳房を、デコルテを保つために、首を後ろに引き、首や背骨を真直ぐにした姿勢をとる。

このように、この時代にみられる姿勢は、「胸や腰」に美意識をもち、胸を高く上げるコルセットを着用した。そのために、日常的な呼吸をするための動作から、様々な要因が連鎖して、肩や胸などの筋肉の発達を促し、「なで肩」「高い位置の乳房」「胸高のデコルテ」の体型を創り出していったと考える。

このことから、姿勢が体型に影響を与え、「時代の美」を決定していたといえる。

本論文では、「美意識」の時代による変遷を文学表現と画像試料により明らかにした。また、「姿勢と体型」との関係については、人体解剖学見地より明らかにし、新たな視点を示唆したといえる。

謝辞

衣裳調査の許可を頂きました神戸ファッション美術館の主任学芸員・浜田久仁雄氏ならびにバース衣裳博物館他、各国の美術館・博物館に感謝申し上げます。

参考文献

- 1) DE BOYSSON Bernadette : Marie-Antoinette à Versailles, Le goût d'une reine, Somogy, Musée des Arts décoratifs de Bordeaux, 2005
- 2) FORRAY=CARLIER, Anne : Marie-Antoinette, Musée Carnavalet1996
- 3) ARRIZOLI-CLEMENTAL, Pierre : Marie-Antoinette, RMN, Grand Palais2008
- 4) LEVER, Evelyne : Marie-Antoinette à Versailles, Le goût d'une reine, RMN2007
- 5) JAMES-SARAZIN, Ariane : Gazette des atours de Marie-Antoinette, RMN, Centre historique des Archives nationales, 2006
- 6) Nancy Bradfield: Costume in Detail Women's Dress, 1730-1930, Costume and fashion Press, 1981
- 7) Norah Waugh : The Cut of Women's Clothes 1600-1930, Theatre Art B00ks, 1968
- 8) Janet Arnold : Patterns of Fashion 1560-1620 Specific Media Group ltd.1985

- 9) AF Ellen Anderson: DANSKEDRAGTERM Modden i 1700-arenne, Nationalmuseet, kobenhaven, 1977
- 10) 伊豆原月絵：祝祭の衣装展ーロココ時代のフランス宮廷を中心にー pp.98-99、目黒区美術館、2009
- 11) 丹野郁：服飾の世界史、白水社、1985
- 12) Alain DECAUX : HISTOIRE DES FRANCAISES, LIBRALIE ACADEMIQUE PERRIN, 1972
- 13) アラン・ドゥコー：柳谷 巖訳、フランス女性の歴史2ー君臨する女たちー、大修館書店、1980
- 14) マリー・クリスチーナ：糸永光子訳、宮廷を彩った寵妃たち、時事通信社、1994
- 15) 飯塚信雄：ロココの落日デュバリー伯爵夫人と王妃マリ・アントワネット、文化出版局、1985
- 16) シュテファン・ツヴァイク：中野京子訳、マリー・アントワネット、上下巻、角川文庫、2007
- 17) アンドレ・カストロ：村上光彦訳、マリー・アントワネット、みすず書房、1972
- 18) F.Hマティニーニ、M.Jティモンズ、M.Pマッキンリ；井上貴央監訳、人体解剖学、西村書店、2003

脚注

- (1) ロープ・ヴァラント：ローブ〔rove〕とは、羽織るガウン状のドレスであり、背中部分にプリーツをたたみ、肩から裾広がりにつくらむツーピースもしくは、ワンピース型の1705年～1715年ごろに急速に流行し、画家ヴァトーが好んで描いたため、ヴァトーの襲とも呼ばれる。
- (2) ロープ・ア・ラ・フランセーズ：robe a la francaise、ローブ〔rove〕とは、英語のドレス〔dress〕と同意語。羽織るガウン状のドレスにストマッカー〔stmacher〕、フランス語でピエス・デストマ〔piece (/) d'estomac〕という逆三角形の布を胸にあて、ローブ・ヴァラントより発展したドレスである。

引用文献

- ①アラン・ドゥコー：川田康子訳、フランス女性の歴史、大修館書店、1980年、p35
- ②前掲書 p107、108
- ③前掲書 p81
- ④マリー・クリスチーナ：糸永光子訳、宮廷を彩った寵妃たち、時事通信社、1994年、p131
- ⑤前掲書、p214、215

- ⑥前掲書、p21、22
- ⑦前掲書、p104
- ⑧前掲書、p144

図版出展

1. 図1 Braun & Schneider : THE HISTORY OF COSTUME Plate #63 - Last Third of the Seventeenth Century、d) Dutch Nobility
2. 図2 アンソニー・ヴァン・ダイク、チャールズ I 世の娘、メアリー女王、1637年、ウィーン美術史美術館
3. 図3 アントワニス・ヴァトー、見通し (La Perspective)、1714-1716年頃、ボストン美術館
4. 図4,5 フランソワ・ブーシェ、朝食 (Le Déjeuner)、1739年、ルーヴル美術館
5. 図6 フランソワ・ブーシェ、化粧 1742年 テュッセン=ボルネミッサ・コレクション
6. 図7 ジャン・マルク・ナティエ、ディアナに扮したポンパドゥール夫人、1748年、ヴェルサイユ宮殿王立美術館
7. 図8 モーリス・カンタン・ドゥラトゥール、ポンパドール夫人、1593年、ルーヴル美術館
8. 図9 トマス・ゲインズバラ、エドモンド・モートン・プレイデル夫人、1765年頃
9. 図10 人体解剖学p225、228を参考に作図
10. 図11 図7に前掲書を参考に筆者加筆
11. 図12 左 J.B.A,ゴージェ・ダゴージェ、宮廷用に盛装したマリー・アントワネット、1775年、ベルサイユトリアノン博物館
12. 図12右 J・A・ウードン、マリー・アントワネット胸像、1782、ベルサイユトリアノン博物館
13. 図13 ジャン=マルク・ナティエ、扇を持つフランス王女アデライド、1749年、ヴェルサイユ宮殿王立美術館
14. 図14 前掲書1: French Nobility in Court Dress
15. マダム・ポンパドゥール夫人の肖像画、1756年、アルテ・ピナコテーク

Change in the Aesthetic Sense of 18th Century Ladies of the French Court — The Relation Between Figure and Posture

Osaka Shoin Women's University Faculty of Liberal Arts Department of Clothing Science
Tsukie IZUHARA

Abstract

The objective of the study is to clarify the aesthetic sense of ladies of the French court from the mid-seventeenth to the eighteenth century. Using literature and pictorial materials from that time, the change in the aesthetic sense of observers was studied. The documentary survey revealed that the definition of women's beauty from the 1600s to the early 1700s consisted of the emotional act of looking and facial aspect of sorrow. In the late 1700s, there was an increase in the number of writings that described women's beauty in terms of their bodies. Expressions such as ample bosom, square and sloping shoulders, tall, and straight back were commonly used in this literature. This indicates that the definition of beauty changed from aspects related to the mind to the outward appearance of the body and the artistic appeal of women's figures. Moreover, from the anatomical point of view, the bearing of the body and figure were considered to be related each other.

Keywords: rococo, women's beauty, aesthetic sense, posture, body